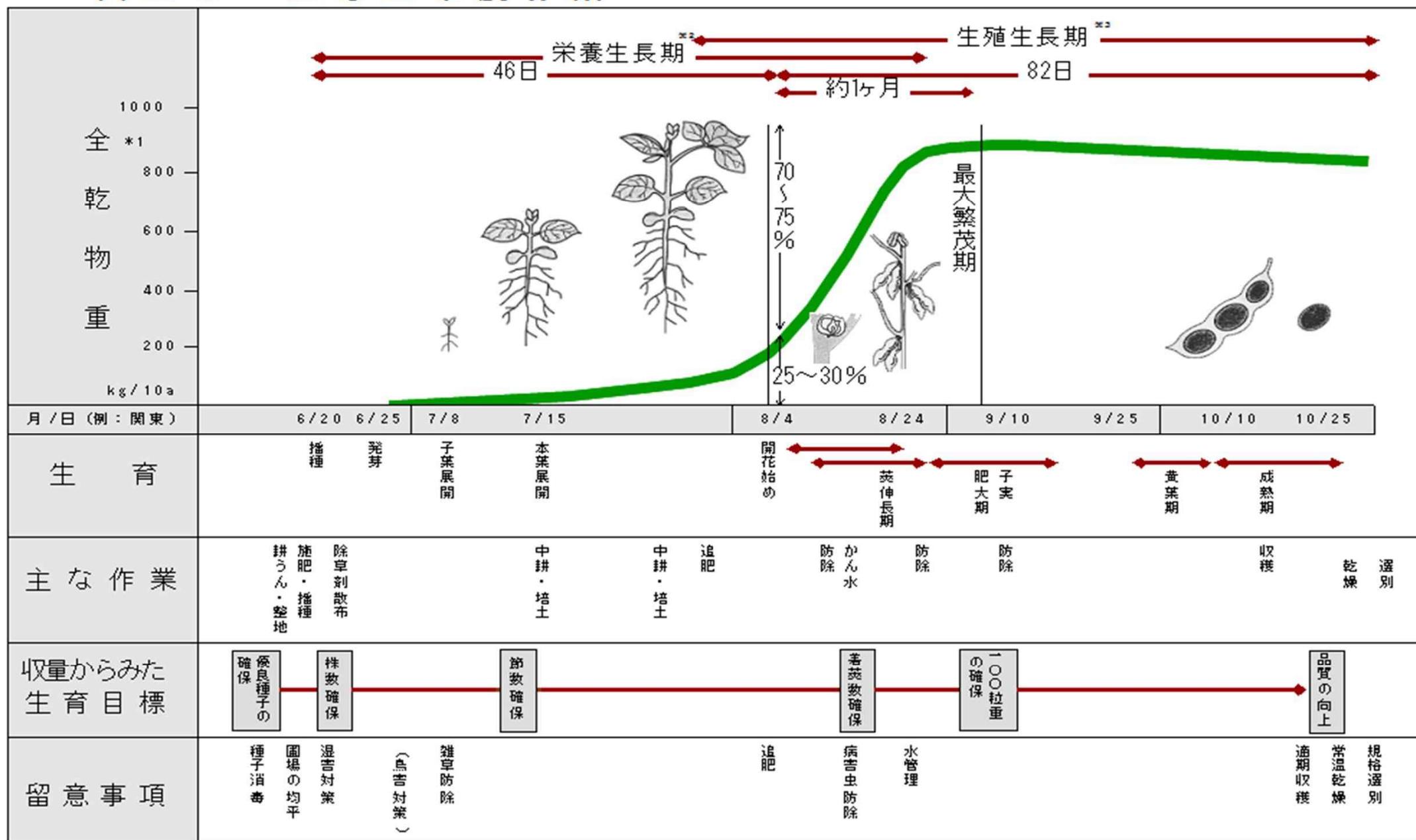


# 大豆をめぐる事情

令和3年1月  
農林水産省

# 1 大豆の栽培体系

## 大豆の一生と主な農作業



※ (注) 栽培月日は関東地方の事例

※ 1 全乾物重: 根, 莖, 葉など作物体全部を乾燥させたときの重量。

※ 2 栄養生長期: 植物が自身の体をつくるために生長する期間。

※ 3 生殖生長期: 子孫を残すために花をつけたり, 実をならせたりする生長期間。

# 2 大豆の価値

大豆は、豆腐、納豆、味噌、醤油、煮豆等、日本の食卓に欠かせない食材や調味料に加工されるなど、古くから利用されてきた。

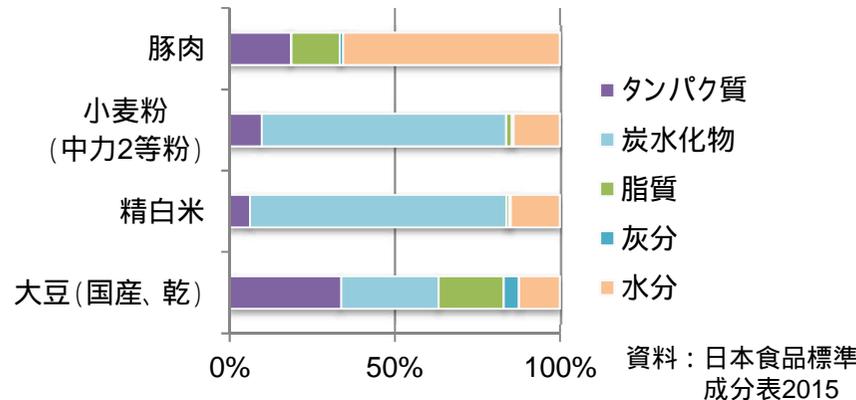
大豆は、タンパク質に富むほか、人間にとって必要なアミノ酸20種類全てが含まれており、また、体の中で作り出すことができない必須アミノ酸9種類も豊富に含まれている。特に、米に不足しているリジンが多く含まれており、米と一緒に食べることにより、栄養価の向上が期待される。

平成25年12月には、「日本人の伝統的な食文化」が、ユネスコ無形文化遺産に登録されるなど、大豆加工品を含めた和食文化が、世界的にも注目を浴びている。

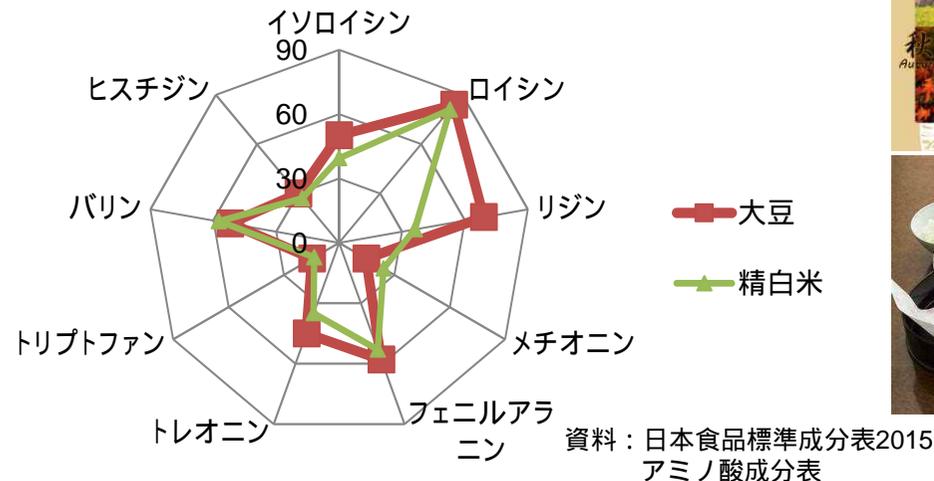
## 大豆の様々な加工用途



## 可食部100g当たりの主要成分割合



## タンパク質1g当たりの必須アミノ酸(mg)



## 和食のユネスコ無形文化遺産への登録



# 3 大豆の需要動向

大豆の需要量は、中期的に増加傾向で推移しており、令和元年度は約367万トンとなった。食品用についても、近年、増加傾向であり、令和元年度は約102万トンとなっている。

国産大豆は、実需者から味の良さ等の品質面が評価され、ほぼ全量が豆腐、煮豆、納豆等の食品向けに用いられる。令和元年度の食品向けに用いられる国産大豆の量は、天候不順により供給量が落ち込み、約21万トンとなった。

## 我が国における大豆の需要状況

(単位:千トン)

	需要量	うち食品用		自給率
		うち食品用	うち国産	
H26年度	3,095	942	226	7%
H27年度	3,380	959	237	7%
H28年度	3,424	975	231	7%
H29年度	3,573	988	245	7%
H30年度	3,567	1,018	203	6%
R元年度 (概算)	3,670	1,019	210	6%

資料:食料需給表

注:「うち国産」は穀物課推定。なお、「うち国産」に種子分は含まれていないが、「自給率」は種子分を含めて算出している。

## 国産大豆に対する実需者の評価

優れている点 ➡ 味、加工適性

劣っている点 ➡ 供給が不安定、ロット規模

## 我が国の大豆の需要量 (令和元年)



飼料、種子等

## 食用大豆の国産、輸入割合 (令和元年)



出典:食料需給表

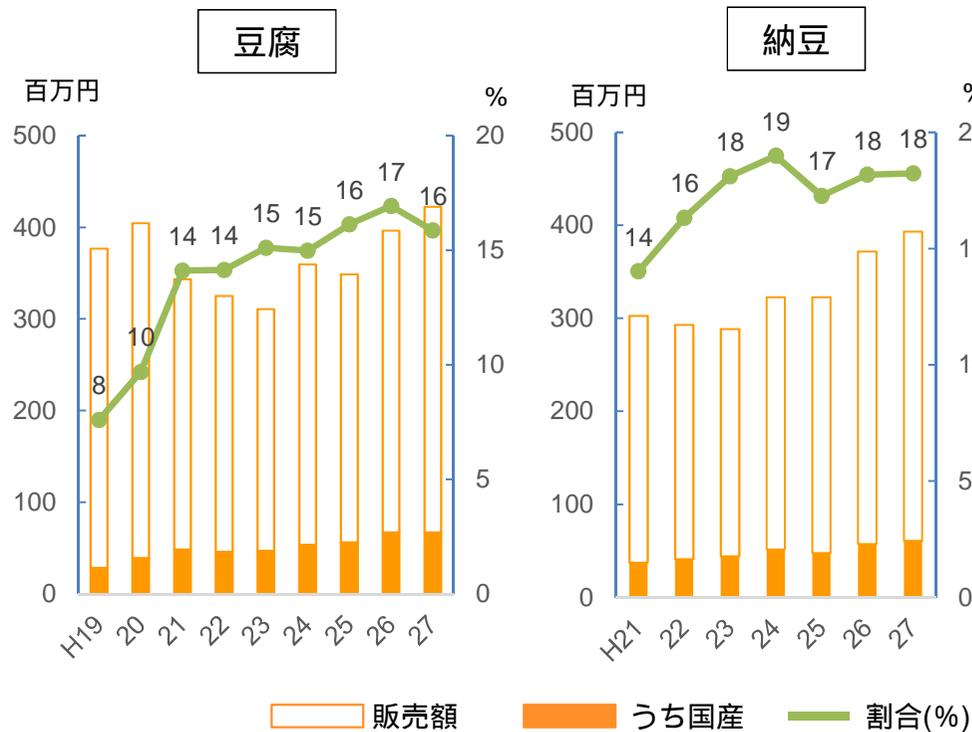
# 4 - 1 実需者のニーズ

近年、量販店等で販売される豆腐や納豆において、「国産」表示の商品の売上が増加傾向。

豆腐、納豆、煮豆、味噌等の食品はそれぞれの特性を踏まえ、原料の大豆に求められる品質が異なるため、これを踏まえた品種の選択が必要。

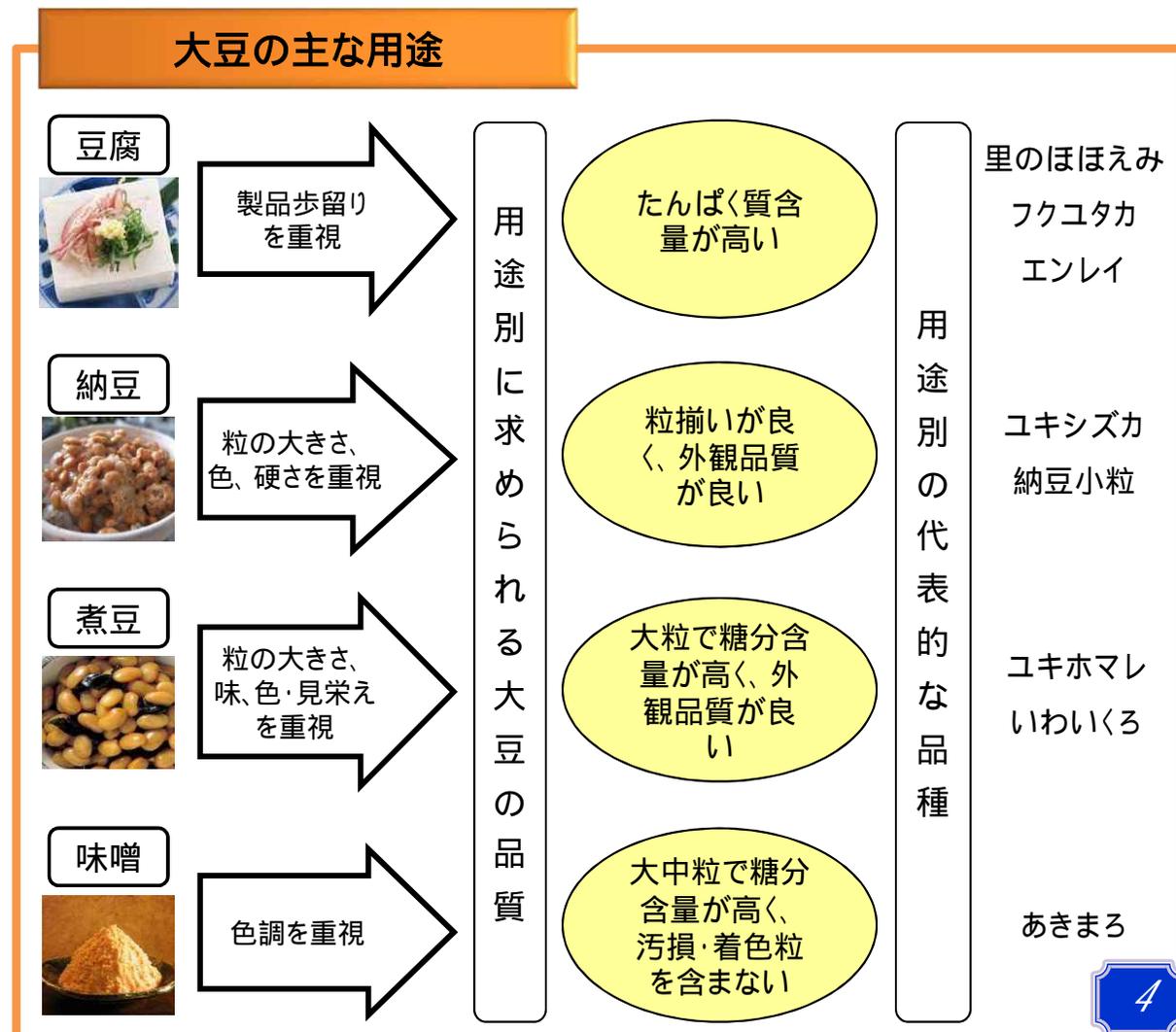
また、実需者からは、均質化、大ロット化といった製造業者の目線に立った、食品加工原料としての品質向上が強く求められている状況。

## 量販店の大豆製品販売額に占める国産表示品のシェア



資料：「日経POSサービス」から農林水産政策研究所作成  
 注1：各年1月のデータ。地域業態は日経POSデータに収録されている全国スーパー  
 注2：対象商品は、豆腐は木綿豆腐、絹ごし豆腐・ソフト豆腐。納豆は粒納豆、ひきわり納豆。

## 用途別に求められる品質



## 4 - 2 実需者のニーズ

今後の食用大豆需要見込みについて実需者にアンケートを実施した結果、全ての業界を通じて、今後の5年間の大豆使用量は増加見込み。

国産大豆についても、価格、供給量、品質の安定が前提となるものの、消費者ニーズへの対応や高付加価値化に向け、需要が堅調となる見込み。

### 食用大豆の需要見込みについて

	H30年度実績数量 (千トン)		R元年度 実績数量 (千トン)	R2年度 需要見込み		R3年度 需要見込み		R7年度 需要見込み	
		うち国産			うち国産		うち国産		うち国産
豆腐・豆乳	1,018	203	1,019	105%	108%	111%	109%	117%	118%
納豆				107%	107%	109%	109%	118%	117%
煮豆				101%	95%	104%	97%	111%	102%
味噌				102%	98%	104%	104%	106%	108%
醤油				98%	103%	100%	104%	105%	107%
その他				102%	99%	104%	101%	109%	108%

H30年、R元年実績数量は「食料需給表」を基に、穀物課推計。

R2年以降の需要見込みは各業界団体からのアンケート結果(豆腐・豆乳:n=16、納豆:n=11、煮豆:n=23、味噌:n=57、醤油:n=61)を基に、穀物課推計。なお、需要見込みについては、R元年の実需者実績を基準とした比率を示す。

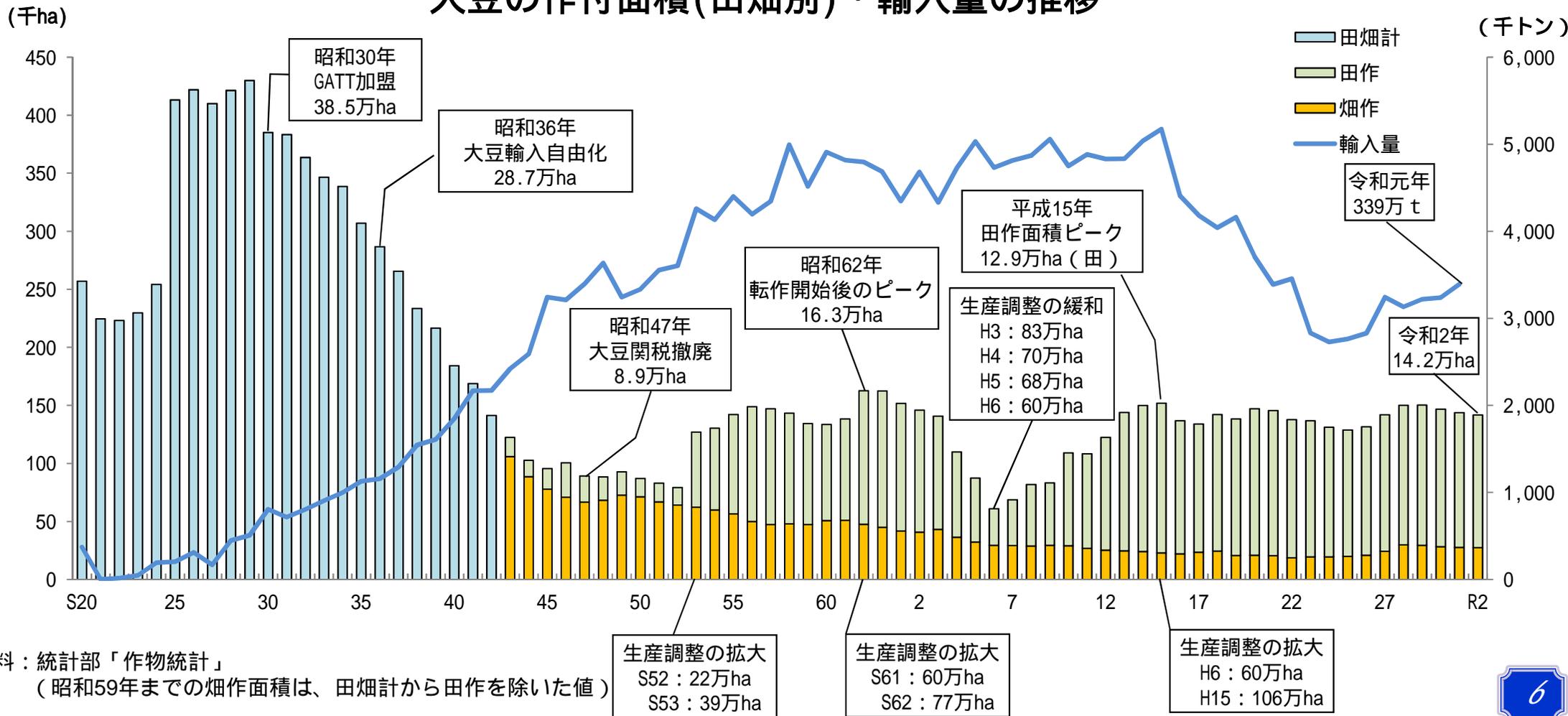
# 5 - 1 国産大豆の作付動向

大豆の作付面積は、戦後の食糧増産により昭和25年に大幅に増加したものの、輸入量の増加や高度経済成長による就業構造の変化等を背景に減少。

昭和44年に米の生産調整が開始され、転作作物として位置付けられたことから、田作による作付面積が増加。昭和53年には、生産調整が拡大され作付面積は大きく増加。その後、生産調整の拡大・緩和に伴い増減したものの、近年は11~12万haで推移。

畑作大豆は、都府県の畑のかい廃や大豆から野菜等の高収益作物への転換により減少していたが、近年は北海道の作付増により増加し、2万ha台後半で推移。

## 大豆の作付面積(田畑別)・輸入量の推移



# 5 - 2 都道府県別作付面積・収穫量・単収

令和元年産の作付面積は全国で143,500haで、北海道（39,100ha）・宮城（11,000ha）・秋田県（8,560ha）の順に多い。

平均単収は、全国が166kg/10aで、北海道（237kg/10a）・新潟（179kg/10a）・佐賀（178kg/10a）の順に高い。

都道府県	R1面積		R1収穫量		R1単収		平均単収	
	(ha)	順位	(t)	順位	(kg/10a)	順位	(kg/10a)	順位
北海道	39,100	1	88,400	1	226	1	237	1
青森	4,760	8	7,660	8	161	5	132	17
岩手	4,290	12	6,310	10	147	9	131	18
宮城	11,000	2	15,100	2	137	13	161	7
秋田	8,560	3	13,900	3	162	4	130	20
山形	4,950	7	7,670	6	155	7	146	14
福島	1,500	24	1,490	22	99	30	129	22
茨城	3,450	14	3,310	15	96	31	126	25
栃木	2,340	17	3,560	13	152	8	170	4
群馬	291	35	387	32	133	14	130	20
埼玉	636	29	547	29	86	34	109	34
千葉	871	25	375	33	43	44	114	30
東京	6	46	8	45	133	14	122	26
神奈川	40	42	55	40	138	12	160	9
山梨	223	37	268	36	120	21	119	28
長野	2,030	19	2,840	18	140	11	166	6
静岡	251	36	191	38	76	41	98	41
新潟	4,410	11	7,670	6	174	2	179	2
富山	4,480	10	6,500	9	145	10	161	7
石川	1,660	21	2,060	20	124	19	147	12
福井	1,810	20	2,190	19	121	20	170	4
岐阜	2,850	15	3,220	16	113	24	109	34
愛知	4,490	9	5,030	12	112	27	138	16
三重	4,290	12	3,520	14	82	35	88	44

都道府県	R1面積		R1収穫量		R1単収		平均単収	
	(ha)	順位	(t)	順位	(kg/10a)	順位	(kg/10a)	順位
滋賀	6,690	6	7,830	5	117	22	147	12
京都	307	34	347	34	113	24	116	29
大阪	15	45	17	44	113	24	120	27
兵庫	2,220	18	1,800	21	81	37	101	39
奈良	143	39	102	39	71	42	131	18
和歌山	28	43	26	43	93	32	103	38
鳥取	641	28	750	27	117	22	142	15
島根	756	27	990	25	131	16	128	23
岡山	1,580	22	1,260	23	80	38	111	31
広島	477	30	439	30	92	33	101	39
山口	871	25	915	26	105	29	110	32
徳島	17	44	7	46	39	46	59	46
香川	60	41	46	41	77	40	93	43
愛媛	338	32	585	28	173	3	127	24
高知	74	40	30	42	41	45	60	45
福岡	8,250	4	8,830	4	107	28	159	10
佐賀	7,820	5	6,260	11	80	38	178	3
長崎	399	31	207	37	52	43	106	36
熊本	2,450	16	3,090	17	126	17	155	11
大分	1,540	23	1,260	23	82	35	96	42
宮崎	219	38	344	35	157	6	110	32
鹿児島	325	33	406	31	125	18	105	37
沖縄	0	47	0	47	18	47	39	47
全国計	143,500	-	217,800	-	152	-	166	-

資料：農林水産省統計部「作物統計」による。

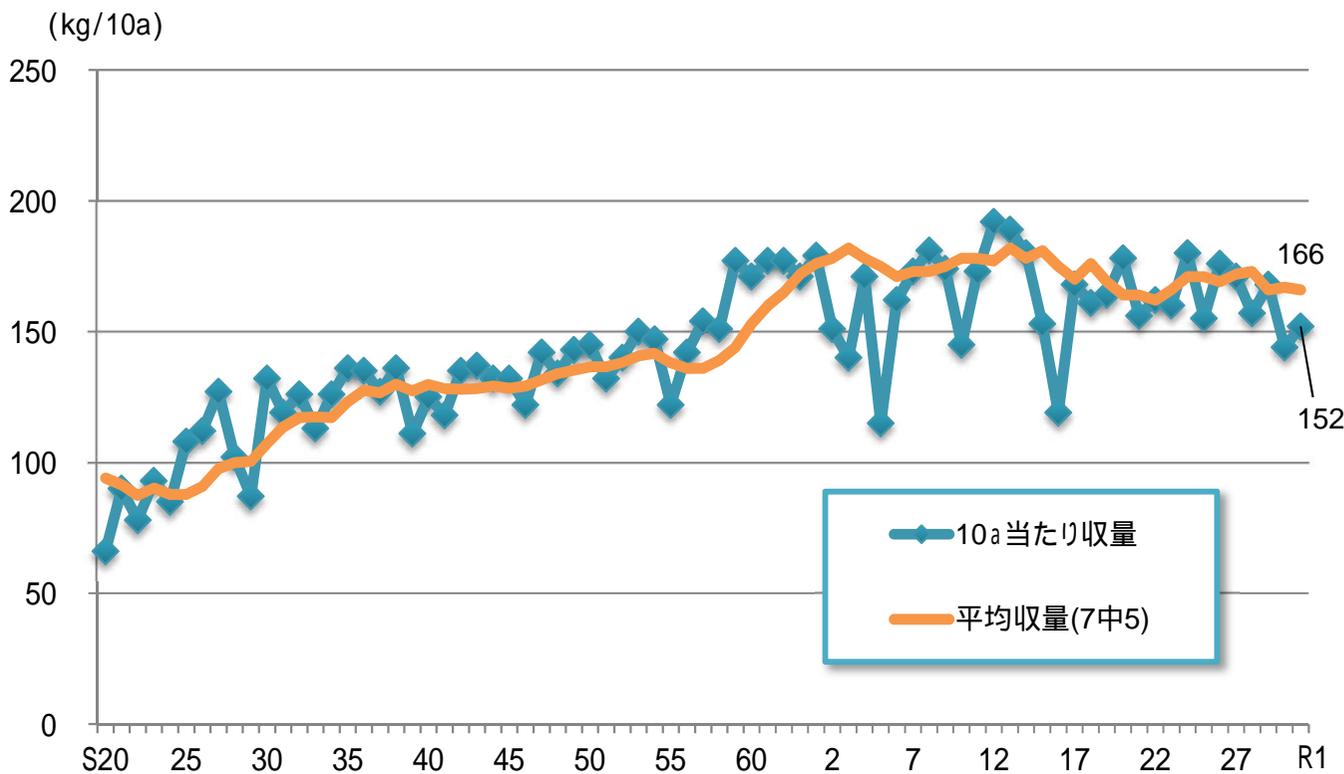
「平均単収」は、原則として直近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年の平均値。

(R2:141,700 ha)

# 5 - 3 単収の推移

令和2年3月に閣議決定された「食料・農業・農村基本計画」において、大豆の生産努力目標を34万tに設定。目標を達成するためには、単収の向上が必須だが、平成元年以降伸び悩んでおり、年次変動も大きい状況。地域ごとの単収もばらつきが大きい。

### 単収の推移(全国：田畑平均)



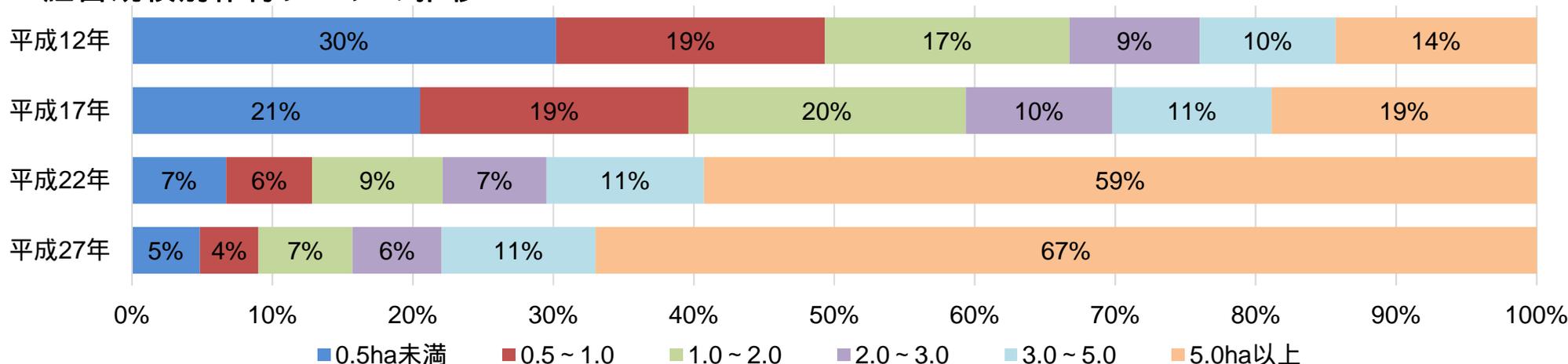
# 6 農家戸数と経営規模

大豆の作付面積 5 ha以上の農家の面積シェアは、平成12年の14%から、平成27年の67%へと約53ポイント上昇し、規模拡大の大幅な進展がみられる。

## 農家戸数と作付面積の比較

	平成12年				平成27年			
	戸数	シェア	面積	シェア	戸数	シェア	面積	シェア
0.5 ha 未満	129,737	82%	17,082	30%	44,832	63%	5,782	5%
0.5 ~ 1.0 ha	16,279	10%	10,821	19%	7,286	10%	5,002	4%
1.0 ~ 2.0 ha	7,572	5%	9,855	17%	5,845	8%	8,000	7%
2.0 ~ 3.0 ha	2,276	1%	5,241	9%	3,222	5%	7,609	6%
3.0 ~ 5.0 ha	1,506	1%	5,466	10%	3,474	5%	13,095	11%
5.0 ha 以上	907	1%	8,104	14%	6,178	9%	80,208	67%

## 経営規模別作付シェアの推移



資料：農業センサス (注) 平成12~17年までは農家数、22年からは経営体数

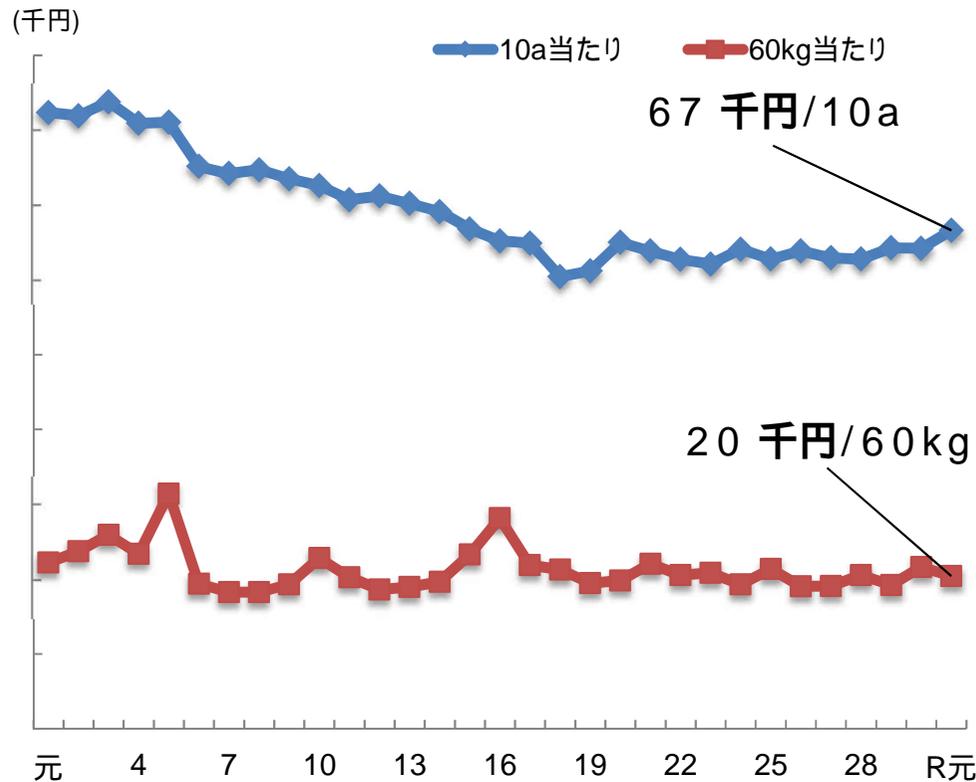
# 7 生産費

規模拡大とともに機械化等が進み、10a当たりの生産費は長期的に減少傾向にあるが、60kg当たりの生産費は単収の伸び悩みにより横ばい。

物財費の内訳を見ると、農機具費が最も高く、約4分の1程度を占めている。

なお、北海道と都府県を比較すると、北海道では肥料等の投入が多いため、10a当たり生産費では都府県より高いが、単収が高いため60kg当たり生産費では低くなっている（平均収量：北海道226kg/10a、都府県152kg/10a）。

## 大豆の生産費の推移



## 大豆の生産費内訳

単位：円

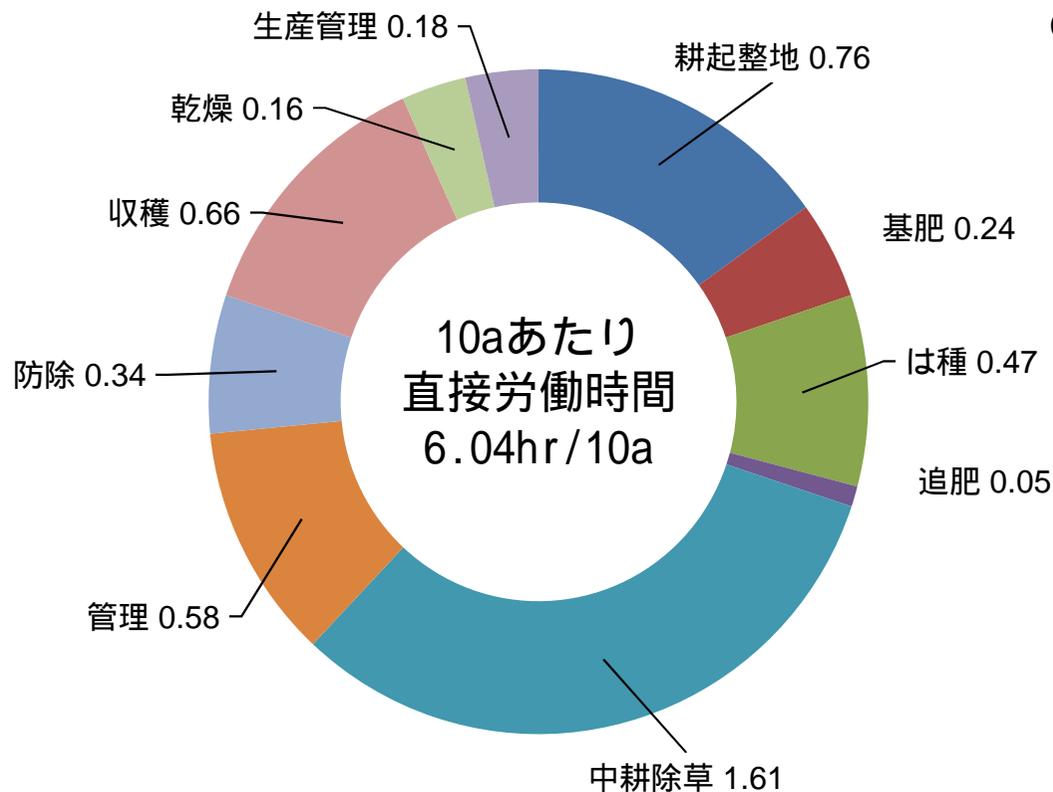
	30年産		令和元年産					
	全国	割合(%)	全国	割合(%)	北海道	割合(%)	都府県	割合(%)
10a当たり物財費	41,467	100.0%	43,433	100.0%	50,478	100.0%	34,244	100.0%
農機具費	10,620	25.6%	11,565	26.6%	13,372	26.5%	9,214	26.9%
賃借料及び料金	7,761	18.7%	7,982	18.4%	8,539	16.9%	7,256	21.2%
農業薬剤費	5,796	14.0%	5,871	13.5%	6,675	13.2%	4,822	14.1%
肥料費	5,462	13.2%	6,019	13.9%	7,556	15.0%	4,016	11.7%
種苗費	3,677	8.9%	3,910	9.0%	4,672	9.3%	2,915	8.5%
光熱動力費	2,320	5.6%	2,511	5.8%	3,045	6.0%	1,814	5.3%
土地改良及び水利費	1,555	3.7%	1,544	3.6%	1,929	3.8%	1,043	3.0%
自動車費	1,325	3.2%	1,443	3.3%	1,563	3.1%	1,286	3.8%
建物費	1,266	3.1%	976	2.2%	979	1.9%	968	2.8%
物件税及び公課諸負担	1,187	2.9%	1,157	2.7%	1,504	3.0%	704	2.1%
生産管理費	288	0.7%	267	0.6%	322	0.6%	194	0.6%
その他の諸材料費	210	0.5%	188	0.4%	322	0.6%	12	0.0%
10a当たり労働費	10,430		11,317		11,654		10,876	
<b>10a当たり全算入生産費</b>	<b>64,211</b>		<b>66,608</b>		<b>74,485</b>		<b>56,330</b>	
60kg当たり物財費	13,954		13,315		12,510		15,185	
60kg当たり労働費	3,508		3,468		2,888		4,822	
<b>60kg当たり全算入生産費</b>	<b>21,605</b>		<b>20,419</b>		<b>18,459</b>		<b>24,980</b>	

資料：「農業経営統計調査 工芸農作物等の生産費」 (年産)

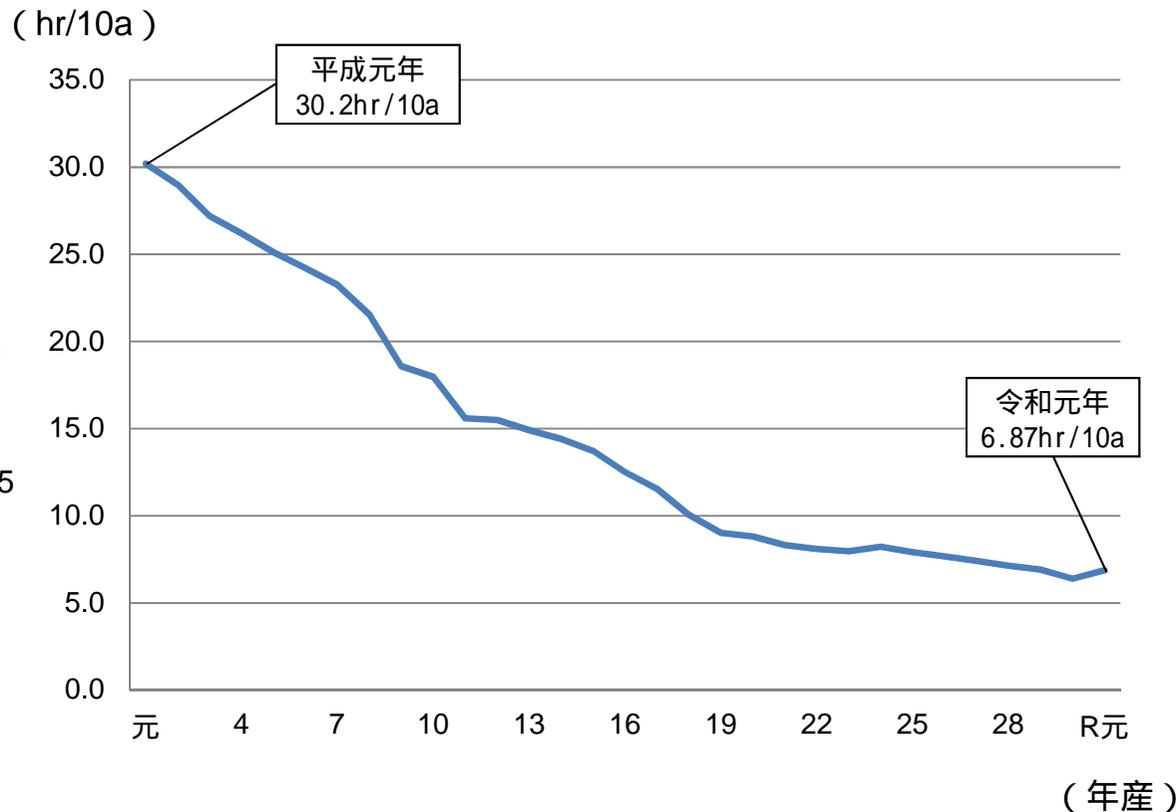
# 8 労働時間

規模拡大の進展等とともに10aあたり労働時間は長期的に減少化傾向で推移。  
 労働時間のうち、耕起整地・基肥・播種・中耕除草作業が半分以上を占めている。近年、不耕起播種、耕うん同時  
 畝立て播種等の低コスト・省力播種技術等の導入が進められている。

大豆の作業別直接労働時間の内訳（平成30年産）



大豆の投下労働時間（間接労働時間含む）の推移

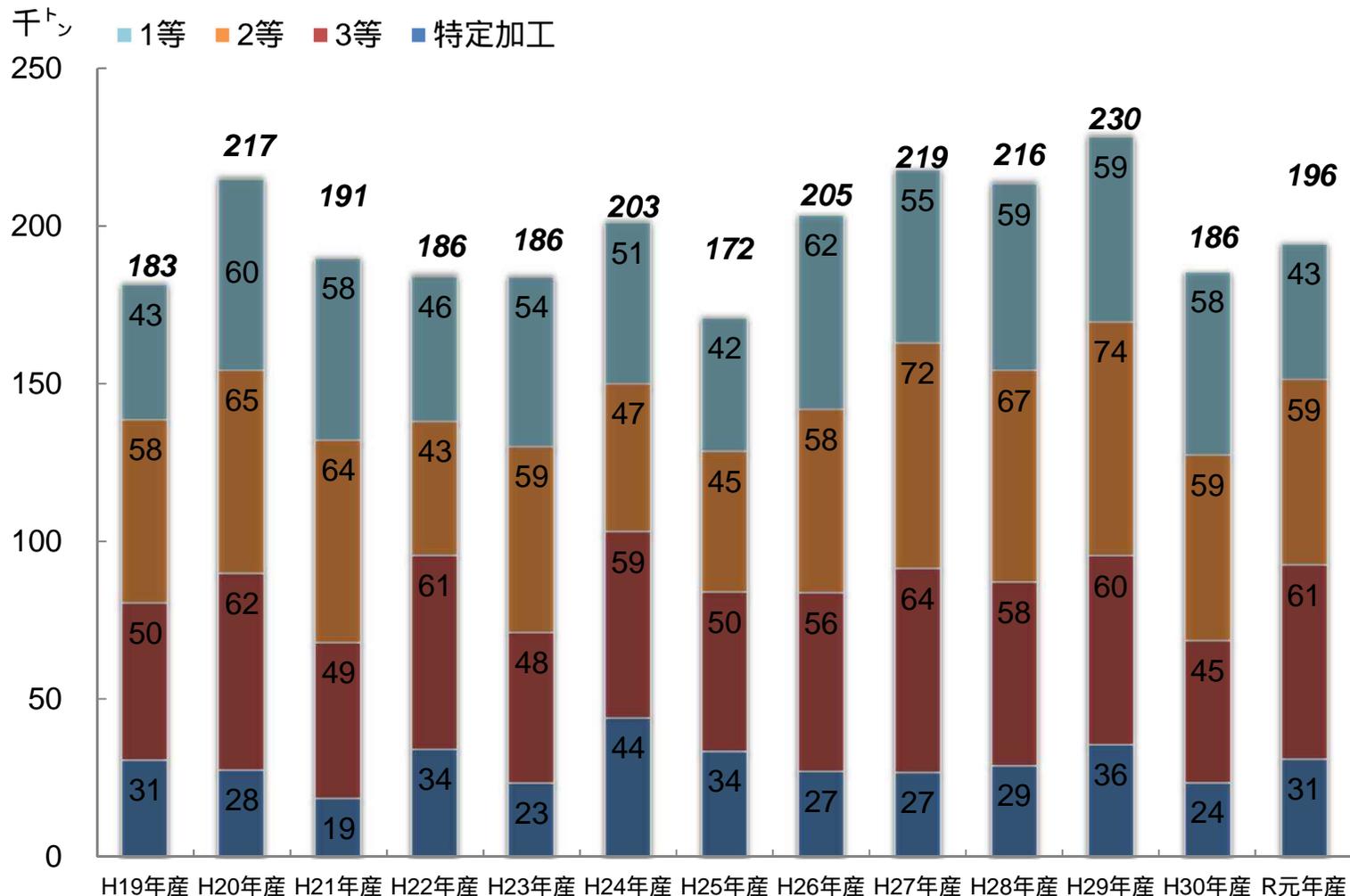


資料：「農業経営統計調査 工芸農作物等の生産費」

# 9 検査等級

農産物検査における3等格付け理由は、粒の充実度等の形質不良、しわ粒、汚損粒が多くなっており、天候不順の影響のほか、不十分な肥培管理、収穫時期の遅れ等、生産技術に起因していると考えられる。

大豆の農産物検査成績の推移（種子用を除く）



(参考) 等級別の品位

		(最高限度(%) )	
項目	等級	水分	被害粒等
		普通大豆	1 等
	2 等	15.0	20
	3 等	15.0	30
特定加工用大豆		15.0	35

注： 特定加工用大豆は、豆腐等の品質に影響を及ぼさない程度の被害粒（皮切れ粒、しわ粒等）はカウントしない。

資料：農産物検査成績(生産翌年3月末日現在の検査数量)

総量には規格外の数量を含むため、数字は一致しない。

# 10 - 1 大豆の交付金制度等と取引方法の変遷

交付金制度等

## 大豆交付金制度

## 経営所得安定対策

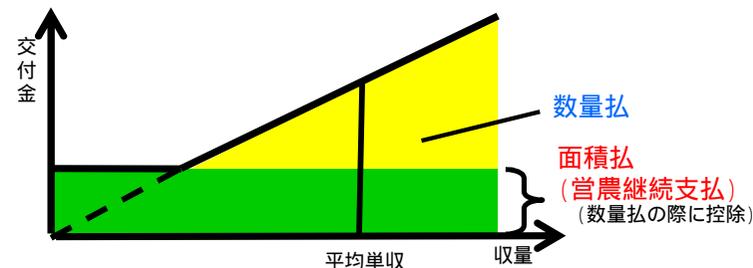
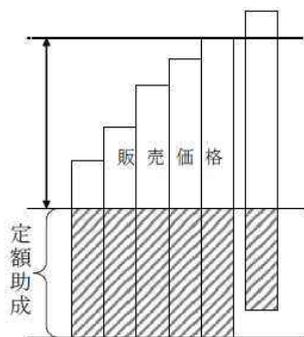
(昭和36～平成11年度まで)

不足払い方式

(平成12～18年度まで)

定額助成方式

(現行)



生産者の手取りは市場評価に関わらず平準化

標準的な生産費と標準的な販売価格の差額分に相当する交付金を交付

**課題**

市場動向が生産者に伝わりづらく、需要に応じた生産が行われにくい

一定単価の助成により、市場評価が生産者手取りに的確に反映

取引方法

(昭和36～平成11年度まで)

収穫後入札取引(原則)

市場開設者:集荷団体  
入札結果:非公表

(平成12年度以降)

収穫後入札取引

市場開設者:第三者機関  
結果公表:落札平均価格等  
集荷数量の1/3以上を上場

相対取引

(入札価格を指標として取引)

契約栽培取引

(入札価格を指標として取引)

(平成30年度以降)

新たに  
播種前入札取引導入

播種前入札取引

生産見込み数量の  
概ね1割を上場

相対取引

(入札価格を指標として取引)

収穫後入札取引

契約栽培取引

(入札価格を指標として取引)

**課題**

年間を通して安定的に数量を確保したいという買い手の要望に応えられない

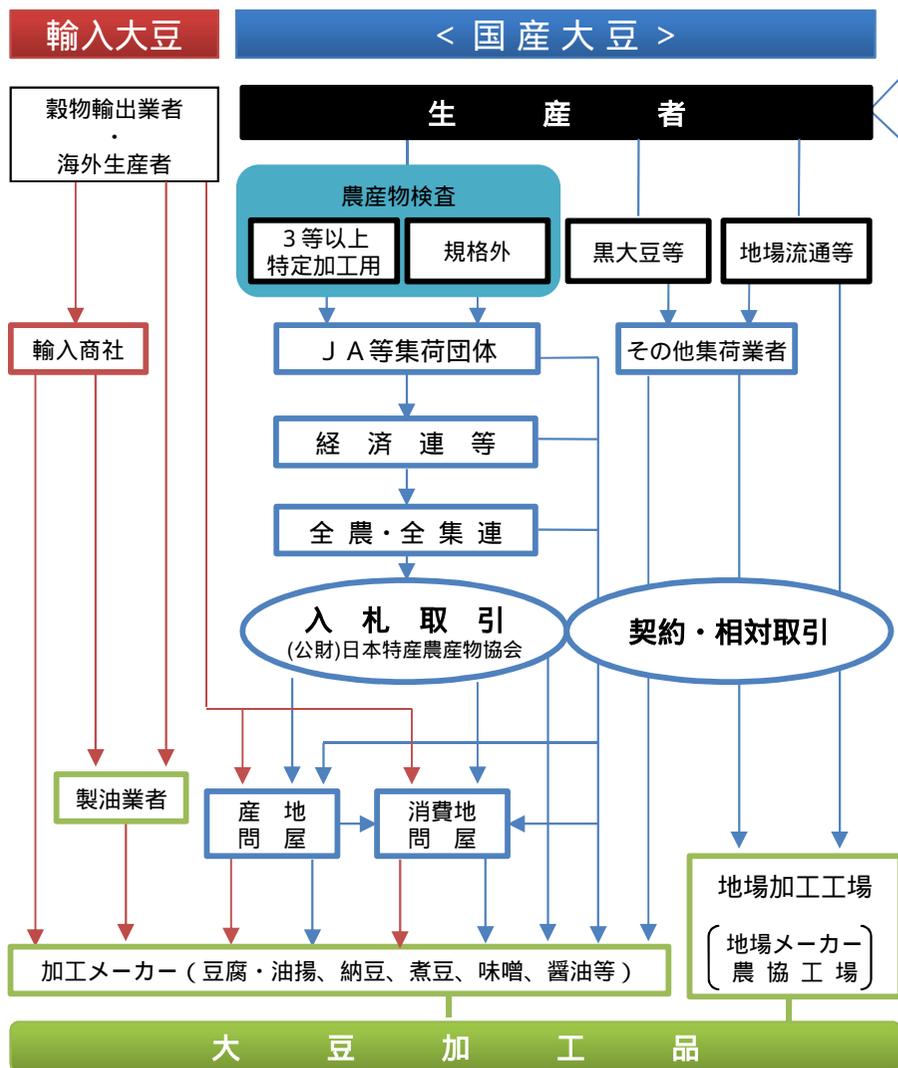
入札取引による透明な価格形成を前提に、相対取引及び契約栽培取引を充実

現行の取引に加えて、新たに播種前入札取引を導入。  
(29年度に試験導入し、30年度から本格導入)

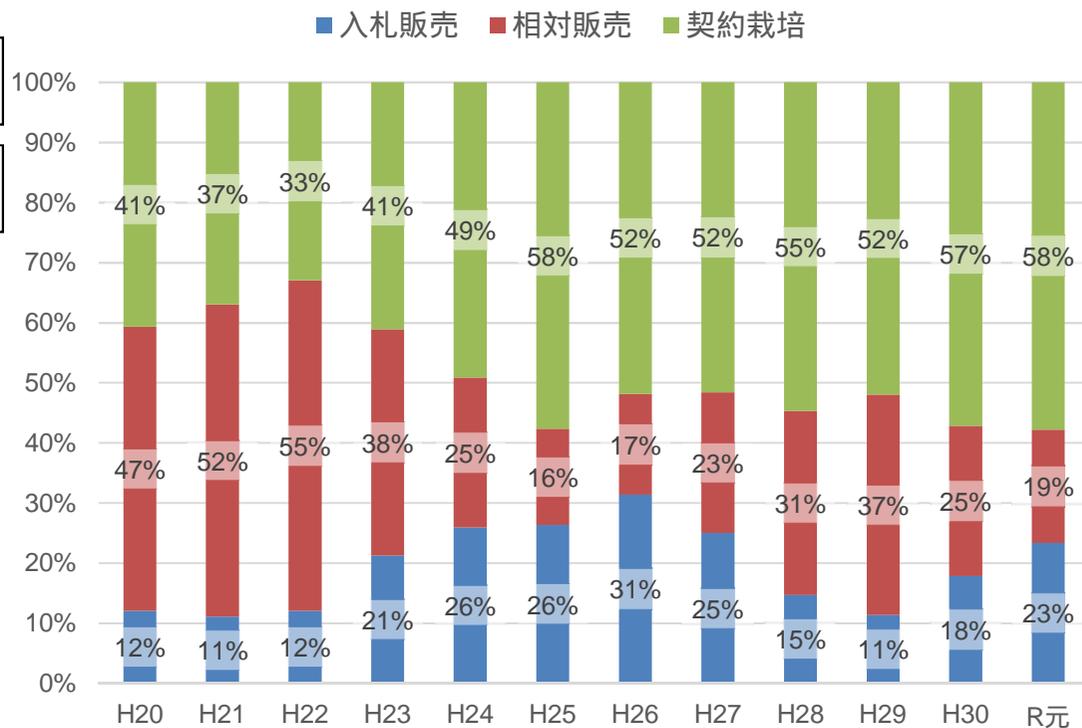
# 10 - 2 国産大豆の流通

大豆の流通は、国産品・輸入品とも民間ベースの自由な流通となっている。  
 国産大豆の販売は大きく分けて入札販売、相対販売、契約栽培の3つがあり、近年は契約栽培の割合が増えてきている。

## 大豆の流通



## 国産大豆の形態別販売数量



集荷団体からの聞き取りにより穀物課で作成

### <入札取引市場について>

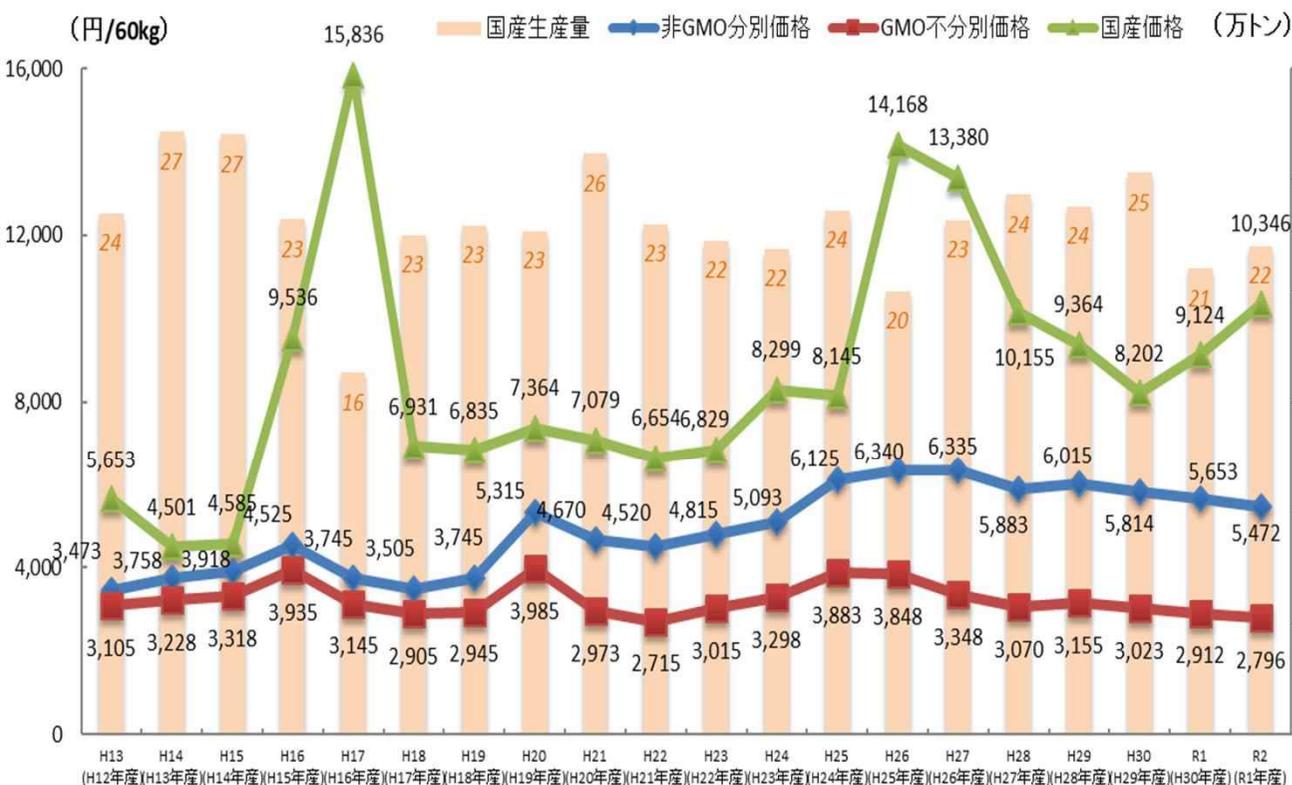
公正・透明な価格形成の場を設けることにより、入札取引以外の契約取引や相対取引に指標価格を提供する役割。  
 H11年産までは売り手自ら開設していたが、透明性・公平性確保の観点から、H12年産より第三者機関である(公財)日本特産農産物協会が開設。  
 売り手は全農と全集連の2者。買い手は170者(H29年産)。  
 12月から概ね翌年9月まで月1~2回(H30年産は7月までの計8回)実施。  
 H30年度から播種前入札取引が新たに導入(H29年度に試験実施)。

# 11-1 国産大豆の生産量と入札取引価格の動向

大豆の生産は、気象災害の影響等により減少する場合があります、これに伴い、価格も大きく変動。

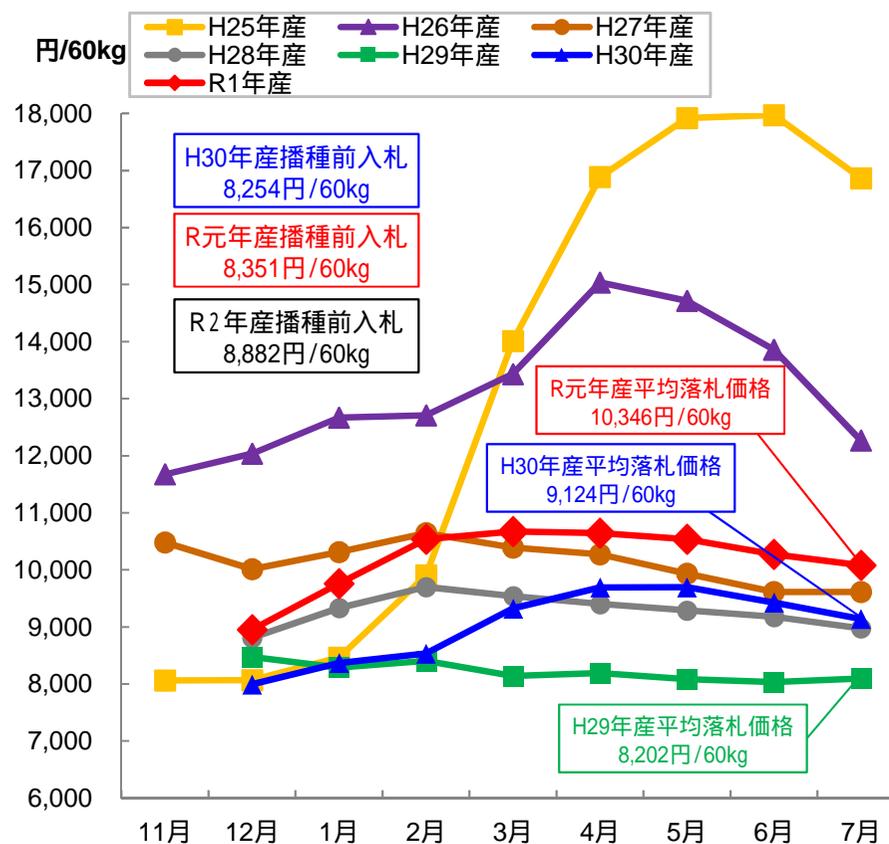
- 令和元年産の生産量は東北、関東、九州等の天候不順の影響で、21万7,800tとなった。
- 価格の安定は、国産大豆の継続的な使用のための重要な条件の一つであり、実需者から安定生産を求める声強い。

## 国産大豆の生産量と価格の推移



注1. 非GMO分別及びGMO分別は、日経市中相場で暦年による平均価格(税抜)。  
 注2. 国産価格は、(公財)日本特産農産物協会における入札結果で各年産の平均落札価格(税抜)。

## 入札取引における落札価格の動向



資料：(公財)日本特産農産物協会入札結果より  
 注：落札価格は各月の全銘柄平均価格(税抜)

# 1 1 - 2 主要銘柄の入札取引価格の推移

平成25年産は台風被害・天候不順による登熟期の生育抑制等による収穫量の減少のため取引価格が大幅に高騰。平成26年産も西日本を中心に8月の多雨・日照不足等により生育が抑制されたことで、取引価格は高値で推移した。平成28、29年産は面積拡大等に伴い供給不足感が解消され、市場は沈静化に向かった。

平成30年産、令和元年産は天候不順、台風の影響による収穫量の減少を受け、一部銘柄において取引価格が高値となった。

(単位：円 / 60kg)

産地	品種銘柄	21年産	22年産	23年産	24年産	25年産	26年産	27年産	28年産	29年産	30年産	R1年産
		平均落札価格	6,654	6,829	8,299	8,145	14,168	13,380	10,155	9,364	8,202	9,124
北海道	大粒 とよまさり	6,324	6,548	7,779	7,770	13,469	12,298	10,028	8,603	7,913	8,612	10,262
	小粒 スズマル	8,594	8,210	7,860	7,943	10,913	10,187	10,173	11,131	9,357	16,149	10,581
	小粒 ユキシズカ	7,338	7,275	7,300	7,402	10,246	9,543	7,675	7,835	8,725	18,553	9,278
岩手	大粒 リュウホウ	-	6,933	6,834	7,980	11,448	12,127	8,774	8,704	7,872	7,914	9,470
秋田	大粒 リュウホウ	6,166	6,532	7,304	8,377	14,927	12,362	8,608	8,412	8,006	8,152	9,683
	中粒 リュウホウ	5,962	6,560	6,746	7,466	13,568	11,815	-	8,325	7,460	7,991	9,525
山形	大粒 里のほほえみ	-	-	8,181	7,646	13,378	12,544	8,914	8,463	8,179	8,325	10,537
	大粒 エンレイ	6,215	6,750	7,671	7,870	12,168	12,796	8,785	8,485	8,117	8,792	10,889
茨城	小粒 納豆小粒	8,219	8,480	8,300	8,500	8,500	10,023	13,509	11,844	10,456	10,975	12,000
栃木	大粒 里のほほえみ	-	-	-	-	13,350	12,462	9,046	8,204	7,759	7,917	10,325
新潟	大粒 エンレイ	6,314	6,815	8,238	8,066	12,361	13,606	9,135	8,563	8,269	8,655	11,007
	大粒 里のほほえみ	-	-	-	-	-	-	-	8,710	8,088	8,058	10,411
富山	中粒 エンレイ	6,111	6,371	8,876	8,146	14,900	12,137	9,325	8,604	7,901	7,962	10,994
福岡	大粒 フクユタカ	6,869	7,226	9,137	9,360	17,189	17,789	13,923	11,185	8,921	9,471	22,804
佐賀	大粒 フクユタカ	6,869	7,198	9,493	9,399	17,056	18,103	13,901	11,610	9,105	9,937	-
熊本	大粒 フクユタカ	6,742	7,163	8,932	8,988	16,760	18,175	12,604	10,446	8,353	9,999	14,879

注1：表中の数字は、平均落札価格（税抜）

注2：赤色帯は、銘柄ごとの平均落札価格を表す棒グラフ

# 12-1 世界の大豆の生産動向

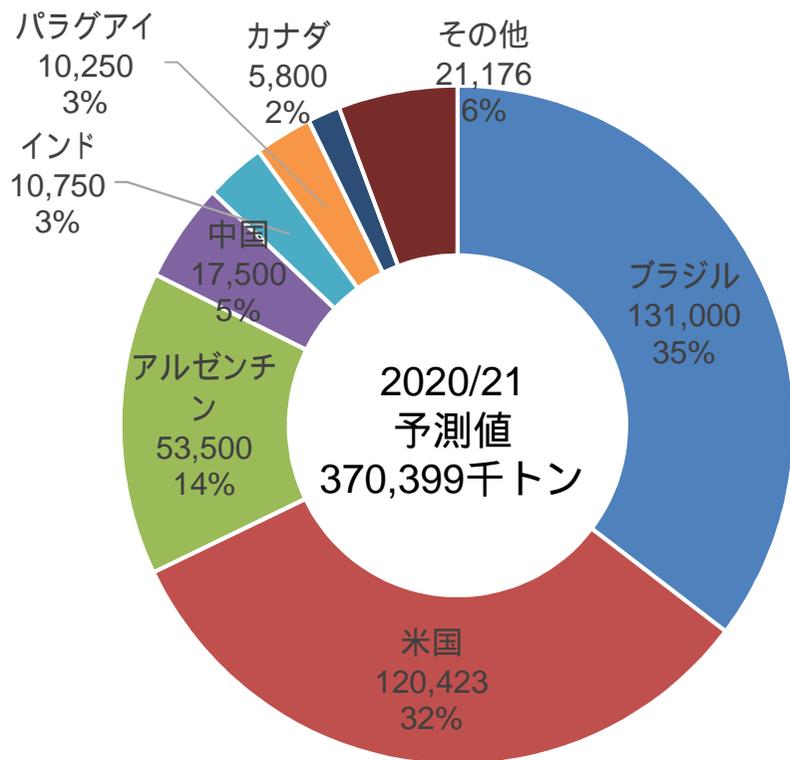
世界の大豆生産量は約3.7億トン。このうち、米国、ブラジル、アルゼンチンでの生産が約8割を占める。

世界の遺伝子組換え大豆のシェアは年々増えており、2017年時点では総栽培面積1.2億haの約8割である0.9億ha。一方で、主要な遺伝子組換え大豆生産国である米国でも、シェアは約95%で頭打ちとなっており、非遺伝子組換え大豆の生産も一定程度維持されている。

世界の大豆の単収は品種改良、栽培技術の向上により増加しており、大豆生産主要国であるアメリカ、ブラジルでは300kg/10a以上の高単収となっている。

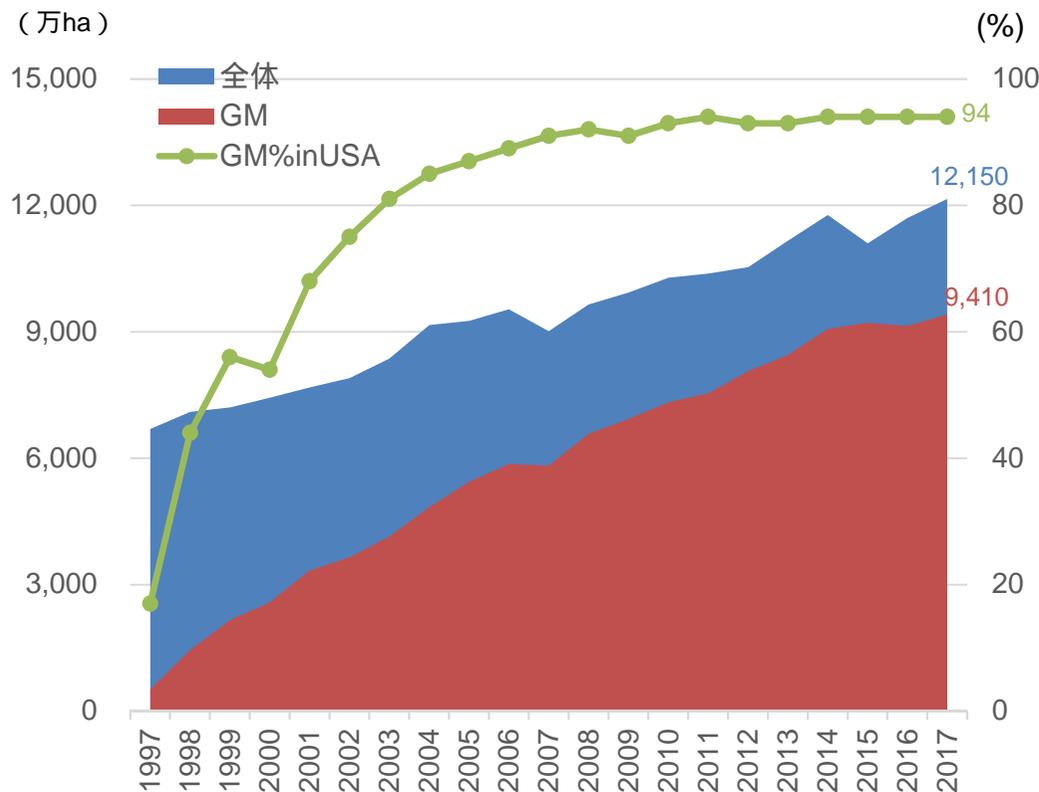
世界の大豆生産量

遺伝子組換え大豆の栽培面積推移 1と米国での栽培シェア 2



【参考：  
主要国の大豆の単収】

	単収 (kg/10a)
世界平均	292
ブラジル	342
アメリカ	358
アルゼンチン	309
中国	188
インド	92
パラグアイ	281
カナダ	284
日本	166



資料：

1 国際アグリバイオ事業団 (ISAAA)  
「Global Status of Commercialized Biotech/GM Crops」

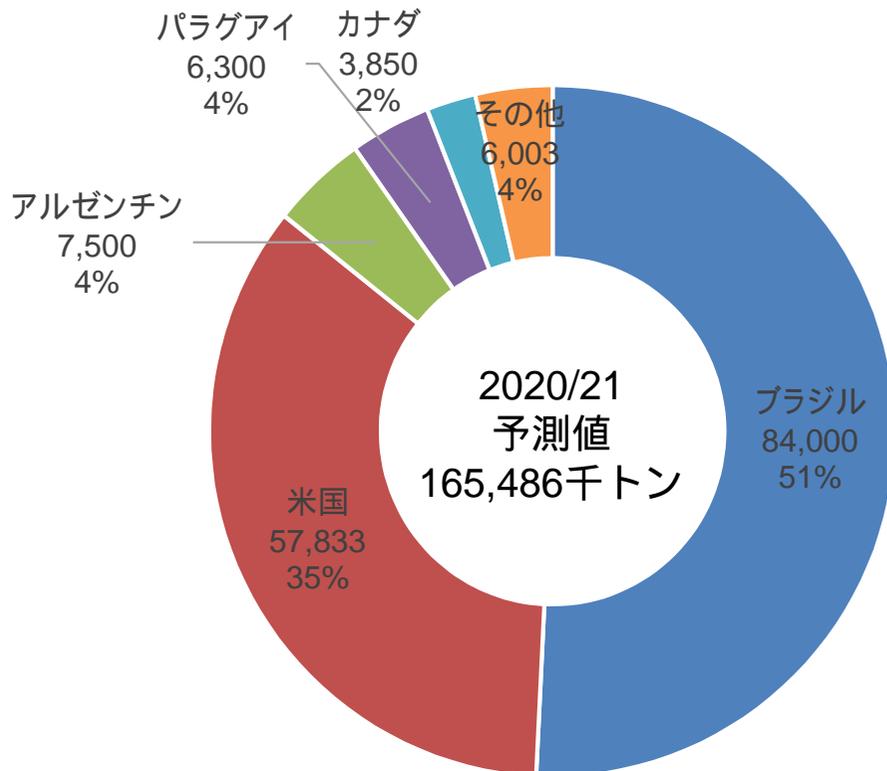
2 米国農務省 (USDA)  
「Adoption of genetically engineered crops in the United States」

資料：米国農務省 (USDA)  
「Production, Supply and Distribution」

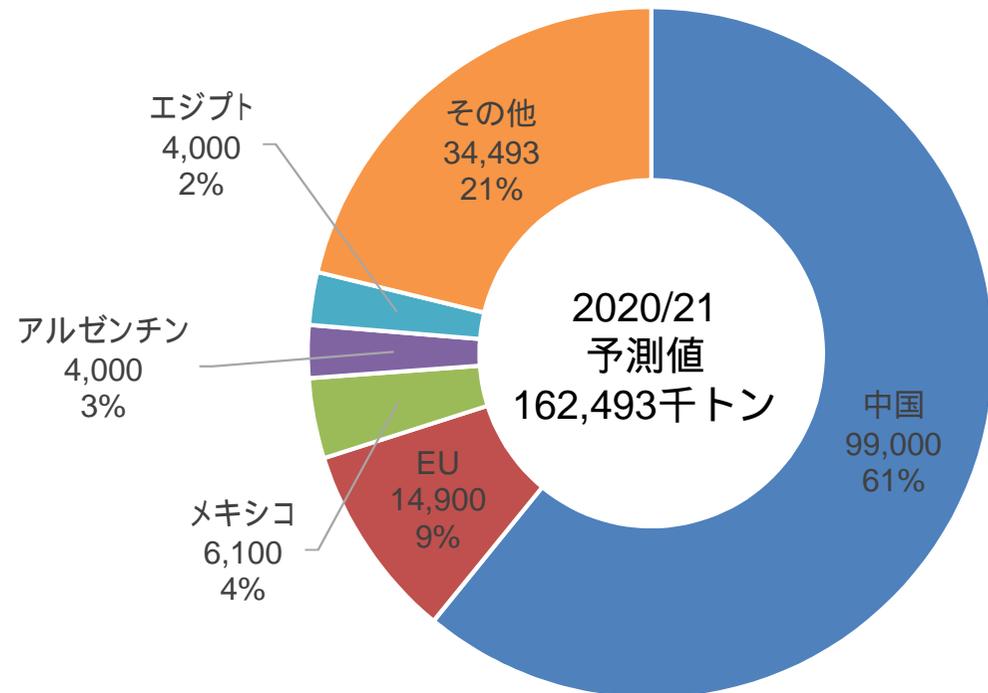
# 1 2 - 2 世界の大豆の貿易動向

世界の大豆輸出入量は約1.6億トン。  
輸出については、生産量の大きいブラジル、アメリカで総輸出量の約8割を占めている。  
輸入については、近年、中国の輸入量が増加しており、世界の総輸入量の約6割を占めている。

### 世界の大豆輸出量



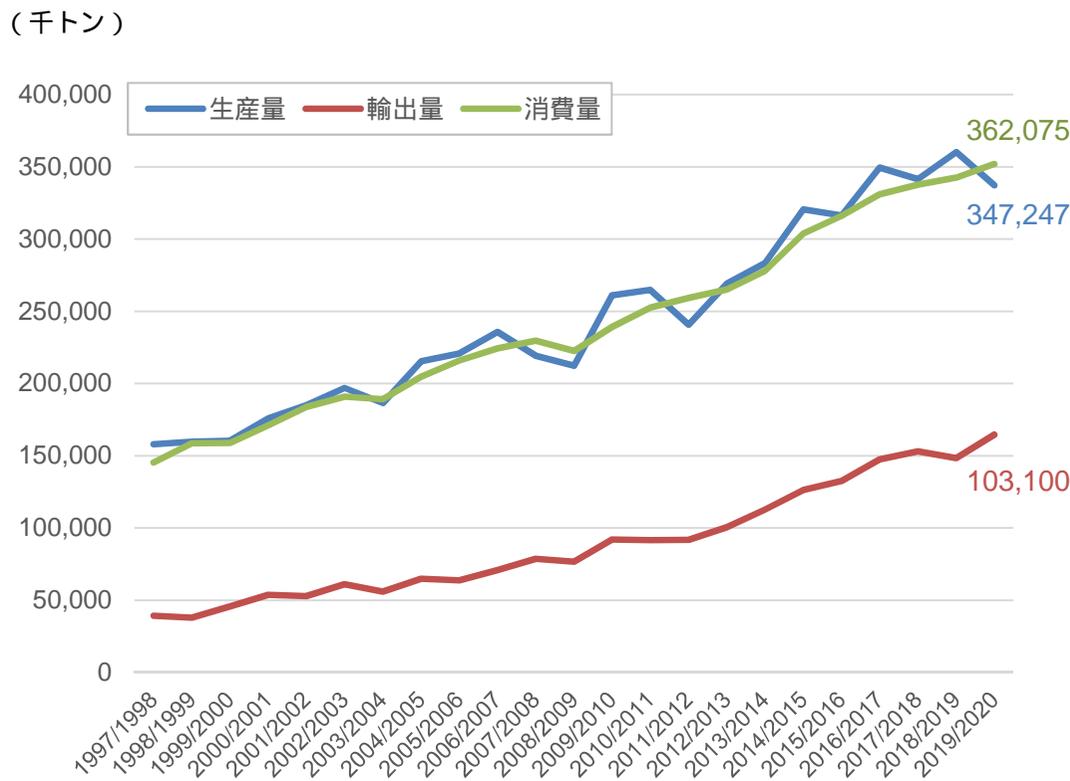
### 世界の大豆輸入量



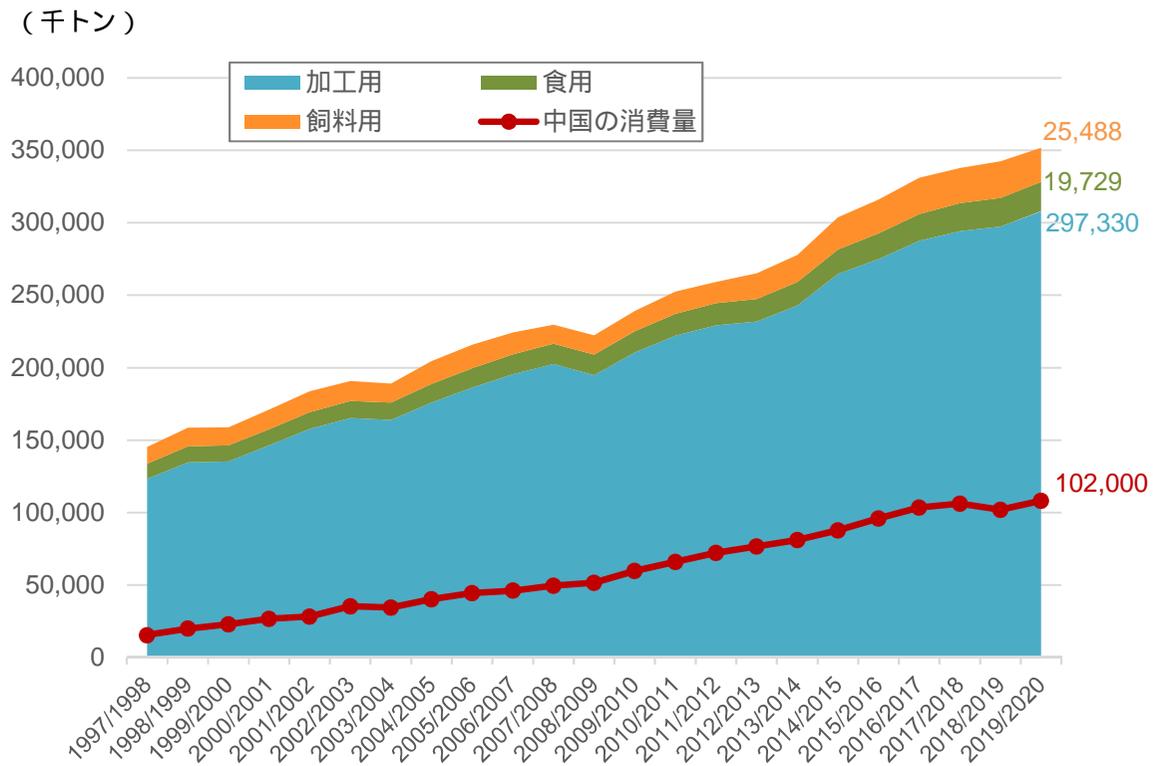
# 1 2 - 3 世界の大豆の消費動向

近年、世界の生産量、消費量ともに増加傾向で推移。  
 特に中国の消費量は伸びが著しく、現在は世界の総消費量の1 / 3に相当する約1億トンを消費している。  
 世界の大豆消費のうち、約9割の3億トンは搾油用等の生産に、約1割が食用や飼料用などに充てられている。

## 世界の大豆の需給



## 世界における大豆の用途別仕向け量の推移



資料：米国農務省 (USDA) 「Production, Supply and Distribution」

資料：米国農務省 (USDA) 「Production, Supply and Distribution」

# 12 - 4 世界の大豆の相場動向

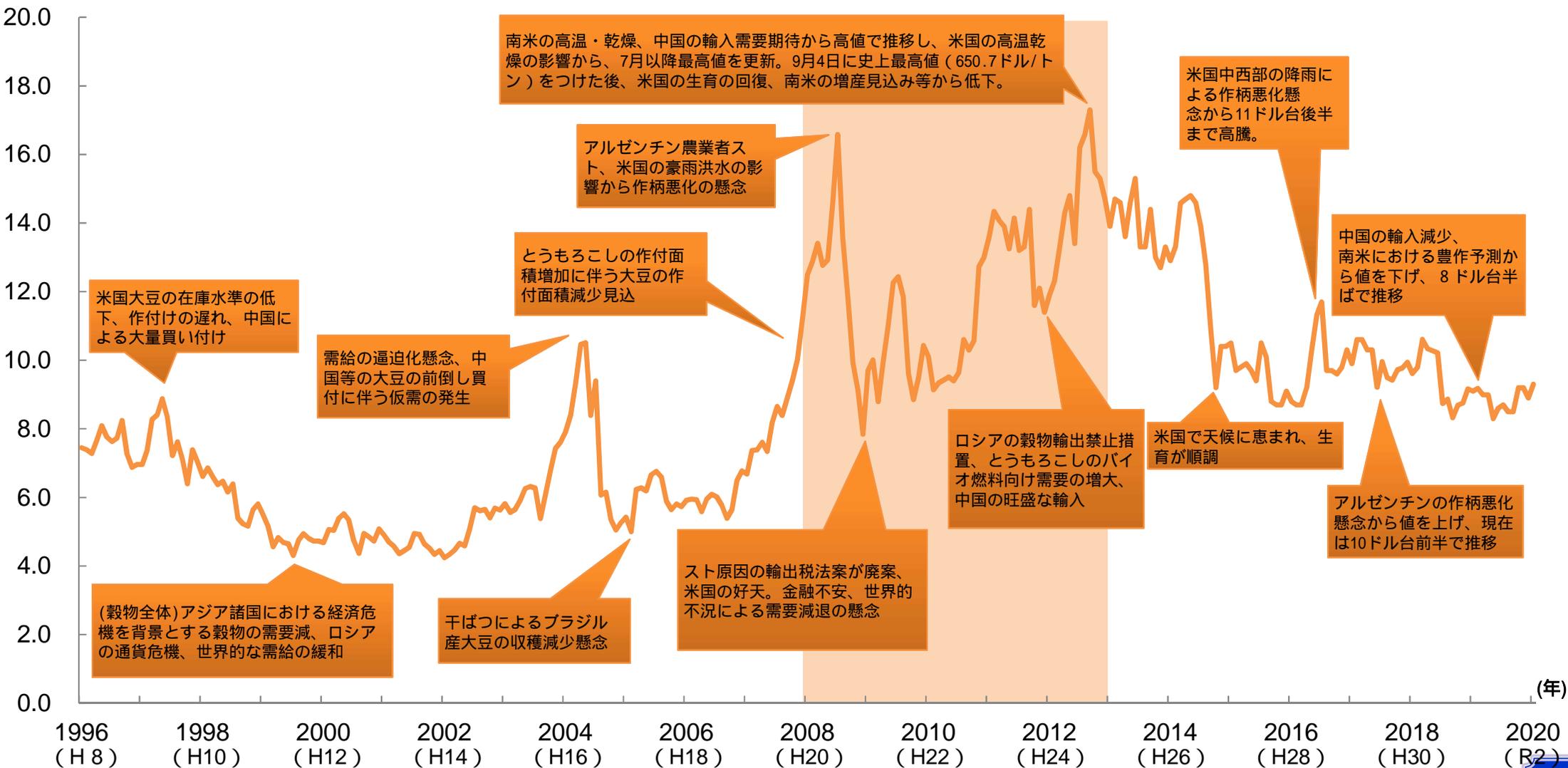
主産地であるアメリカ、ブラジルの生育状況、大消費国である中国の動向により変動。

- 平成20-25年は価格が高水準であったが、近年は大幅な高騰は見られず、1ブッシェルあたり9ドル台前後で推移。

## シカゴ相場の推移

(ドル/ブッシェル)

大豆においては、1ブッシェル=約27kg



資料：シカゴ商品取引所

# 12 - 5 日本の大豆の年次別国別輸入状況

日本が輸入している大豆は、米国産が約7割を占め、以下、ブラジル、カナダ、中国と続く。

< 日本大豆の年次別国別輸入状況 >

(単位：万t、%)

輸入先 C.Y.	合計	アメリカ	ブラジル	カナダ	中国	その他
昭和40	185	146 (79%)	0 (0%)	1 (0%)	38 (20%)	0 (0%)
45	324	295 (91%)	0 (0%)	0 (0%)	29 (9%)	0 (0%)
50	333	304 (91%)	4 (1%)	1 (0%)	24 (7%)	0 (0%)
55	440	423 (96%)	3 (1%)	2 (1%)	10 (2%)	2 (0%)
60	491	435 (89%)	22 (4%)	2 (0%)	29 (6%)	3 (1%)
63	469	366 (78%)	58 (12%)	4 (1%)	30 (6%)	12 (3%)
平成元	435	326 (75%)	69 (16%)	5 (1%)	28 (6%)	7 (2%)
3	433	372 (86%)	27 (6%)	3 (1%)	28 (6%)	3 (1%)
8	487	393 (81%)	38 (8%)	7 (2%)	16 (3%)	33 (7%)
13	483	365 (75%)	71 (15%)	25 (5%)	13 (3%)	10 (2%)
18	404	322 (80%)	38 (9%)	28 (7%)	16 (4%)	0 (0%)
23	283	189 (67%)	53 (19%)	35 (13%)	4 (2%)	0 (0%)
24	273	176 (65%)	55 (20%)	38 (14%)	4 (2%)	0 (0%)
25	276	166 (60%)	65 (24%)	38 (14%)	4 (1%)	3 (1%)
26	283	185 (65%)	59 (21%)	35 (12%)	4 (1%)	1 (0%)
27	324	233 (72%)	51 (16%)	37 (11%)	3 (1%)	0 (0%)
28	313	224 (71%)	52 (17%)	34 (11%)	3 (1%)	0 (0%)
29	322	235 (73%)	52 (16%)	32 (10%)	3 (1%)	0 (0%)
30	324	232 (72%)	56 (17%)	33 (10%)	3 (1%)	0 (0%)
令和元	339	249 (73%)	55 (16%)	33 (10%)	2 (1%)	0 (0%)
(うち黄大豆)	339	248 (73%)	55 (16%)	33 (10%)	2 (1%)	0 (0%)
(うち色大豆)	0.6	0.2 (28%)	- (0%)	0 (4%)	0.4 (68%)	0 (0%)

資料：財務省「日本貿易統計」(品別国別)による。

# 1 3 食料・農業・農村基本計画

令和2年3月に閣議決定された「食料・農業・農村基本計画」において、大豆の生産努力目標を34万トンに設定。

実需者の求める量・品質・価格に着実に応えるため食品産業との連携強化を図りつつ、連坦化・団地化やスマート農業によるコストの低減、排水対策の更なる強化、耐病性・加工適性等に優れた新品種の開発・導入等を通じて、生産量の向上を推進する。

## 国産大豆に関する指標

### H30（現状）

生産量	21万トン
作付面積	15万ha
10a当たり平年収量	167kg/10a
品目別自給率	6%



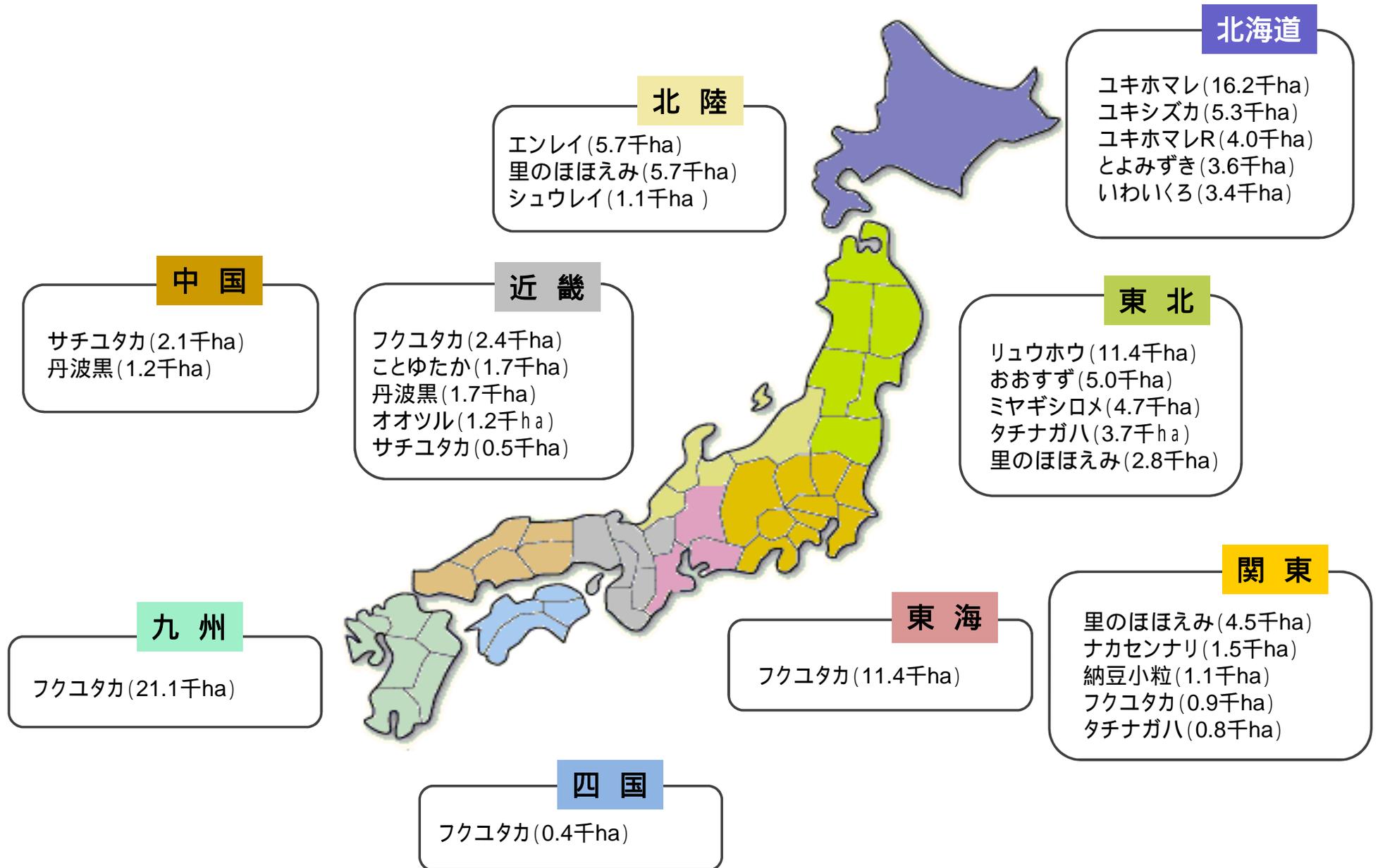
### R12（目標）

34万トン
17万ha
200kg/10a
10%

## 克服すべき課題

- 国産原料を使用した大豆製品の需要拡大に向けた生産量・品質・価格の安定供給
- 耐病性・加工適性等に優れた新品種の開発導入の推進
- 団地化・ブロックローテーションの推進、排水対策の更なる強化やスマート農業の活用による生産性の向上
- ほ場条件に合わせて単収向上に取り組むことが可能な環境の整備

# 14-1 新品種の開発・普及の促進 ~ 各産地の主な品種



注) 括弧内の面積はH30年産の作付面積(穀物課調べ)

# 1 4 - 2 新品種の開発・普及の促進～平成20年度以降に育成された品種

## 近畿・中国・四国

あきまる(広島)  
サチユタカA1(兵庫)  
あやみどり(奈良)  
こがねさやか  
ななほまれ  
たつまる  
はつさやか  
フクユタカA1  
くろさやか  
すずかれん  
はつながは  
フクハヤテ  
フクミノリ  
ことゆたかA1  
星のめぐみ

## 九州

すずかれん(熊本)  
はつながは  
フクハヤテ  
くろさやか  
フクミノリ  
フクユタカA1  
ちくしB5号(福岡)  
ふくあかね

## 東海

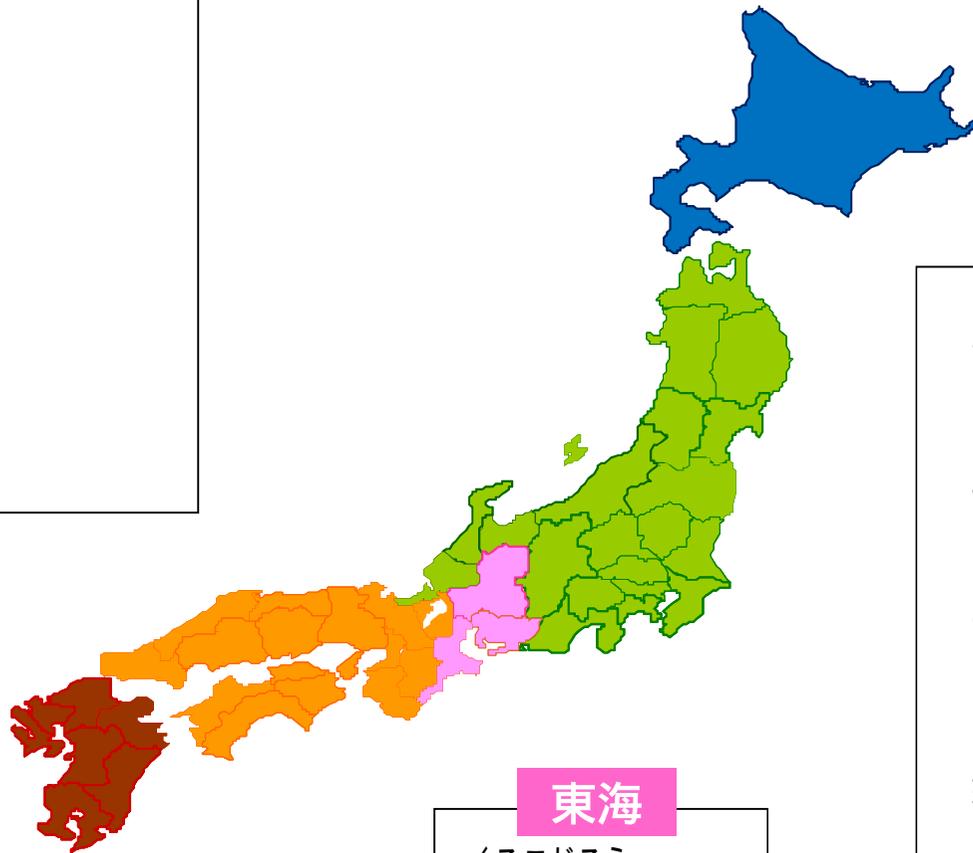
くろこじろう  
フクユタカA1(愛知)  
すずかれん  
フクミノリ

## 北海道

ユキホマレR(北海道)  
スズマルR(北海道)  
とよみづき(北海道)  
つぶらくろ  
ゆめのつる(北海道)  
とよまどか(北海道)

## 東北・関東・北陸

里のほほえみ  
(山形、福島、栃木、茨城、  
群馬、埼玉、新潟、石川、福井)  
シュウリュウ(青森、岩手、山形)  
すずほまれ(長野)  
あきみやび  
シュウレイ(富山)  
サチユタカA1  
フクユタカA1  
あやみどり  
ななほまれ  
華大黒  
くろこじろう  
はたむすめ  
黒丸くん  
えんれいのそら



注) 品種名の後は奨励品種採用都道府県(平成30年3月末月現在)

# 14-3 新品種の開発・普及の促進 ~ 現状の品種

全国に流通する大豆は、上位5品種で約6割を占めているが、特に育成年の古い品種において、生産性・品質の不安定さや、生産効率の点から課題もあるため、生産者、実需者からより優れた品種の開発・普及を求める声が寄せられている。

## 各品種の主な課題

**北海道**  
**【ユキホマレ】**  
 総作付面積 16,256ha  
 全面積に占める割合 11.1%  
**41,510トン**  
**シェア26.8%**  
 とよまさり銘柄で集計

【品種の課題】  
 ・タンパク質含量が低く、豆腐の製品歩留まりが低いと言われていたが、製法等により克服されつつある。

**東北～北陸地域**

**【エンレイ】**  
 総作付面積 6,770ha  
 全面積に占める割合 4.6%  
**8,455トン**  
**シェア5.5%**

**【里のほほえみ】**  
 総作付面積 12,958ha  
 全面積に占める割合 8.8%  
**14,504トン**  
**シェア9.3%**

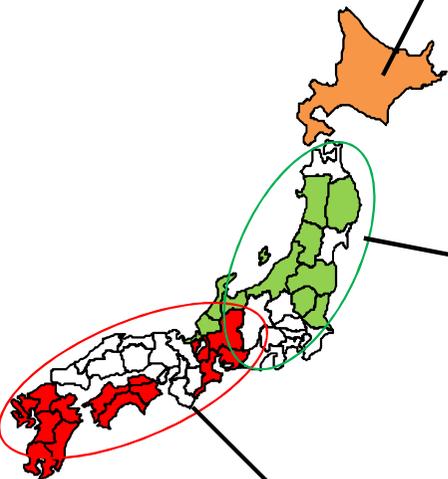
**【リュウホウ】**  
 総作付面積 11,403ha  
 全面積に占める割合 7.8%  
**11,434トン**  
**シェア7.4%**

【品種の課題】  
 ・しわ粒の発生による品質低下  
 ・小粒化による品質・収量低下  
 ・機械収穫適性が低い

【品種の課題】  
 ・しわ粒・紫斑粒の発生による品質低下

**東海～九州地域**  
**【フクユタカ】**  
 総作付面積 36,396ha  
 全面積に占める割合 24.8%  
**37,189トン**  
**シェア24.0%**

【品種の課題】  
 ・大規模化に伴い、1品種の作付では作期が集中し、労働配分に限界



数量はH30年産全農集荷実績、面積は農林水産省調べ

# (参考) 普及が期待される主な新品種

## 【とよまどか】

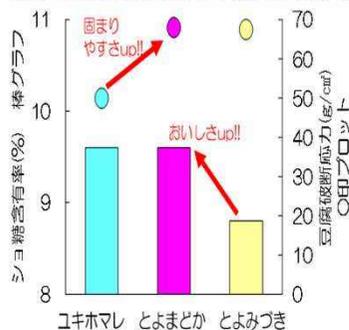
豆腐加工適性に優れ、  
低温抵抗性が高い大豆

導入予定地域: 北海道

### ★加工適性に優れる

シヨ糖含有率が高く、なおかつ、豆腐が良く固まります。

\*一般にシヨ糖含有率が高いほど、甘くておいしい豆腐ができます。

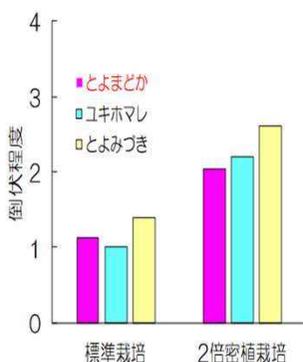


### ★栽培しやすい

寒さに強く、倒れにくいです。

低温栽培による裂開粒

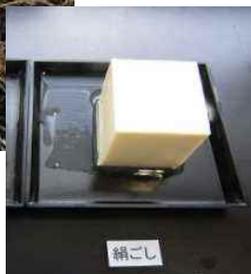
とよまどか



## 【シュウリュウ】

大粒で豆腐加工適性  
が高く、多収の大豆

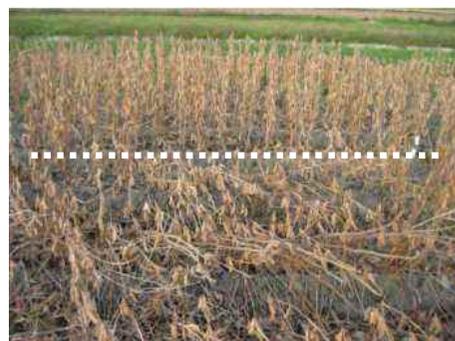
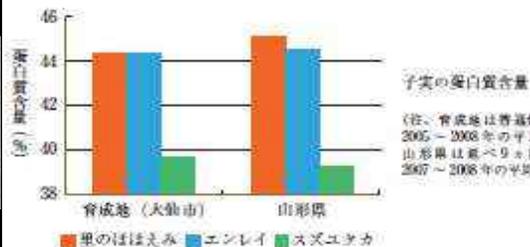
導入予定地域: 東北



## 【里のほほえみ】

倒れにくく大粒良質で  
高タンパクの大豆

導入予定地域: 東北・関東・北陸

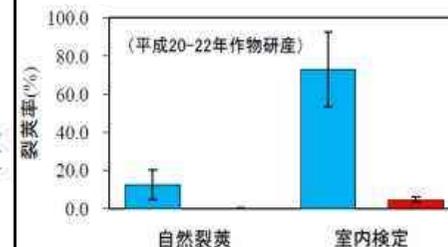


耐倒伏性の比較  
(手前: エンレイ、奥側: 里のほほえみ)

## 【フクユタカA1号】

豆腐用主力品種の  
難裂莢性<sup>なんれっきょうせい</sup>を強化した大豆  
収穫ロスが低減される性質

導入予定地域: 関東~九州



(左: 難裂莢性導入品種、右: 既存品種)



(左: 難裂莢性導入品種、右: 既存品種)